

『暗号解読』が売れたという事実

稲葉さんと山形さんには、ビジネス書を中心として「ビジネス・科学」という括りでお話していただければと思うんですけども、まず山形さんの5冊からいきたいんですが、一番お薦めっていうのはどれなんですかね？

山形「読み物として面白かったという意味では『暗号解読』(サイモン・シン)ですね。暗号というものの広い話をしたうえで、最後には最前線の量子暗号の話まであつて。理屈もちゃんと説明してるし、なぜ暗号について考えなきゃいけないのかという話もしてるし。

また、一部の本屋さんの話だと、この本のおかげで結構数学系の本に興味があるという人も増えてるという」

稲葉「この人は『フェルマーの最終定理』(新潮社)を書いた人ですよ」

山形「そうそうそう」

稲葉「海外は、やっぱりこの手のプロから転向したサイエンス・ジャーナリストが多くて、例えば生物化学のマト・リンドレーなんかもそうですけど、本物の訓練を受けた人がサイエンス・ライターになって優れた本を書いている。その点、日本では、これに匹敵するプロ転向組の本格的サイエンス・ライターがいらないという」

山形「悲しいところです。暗号の本では、たぶん来年にステイヴン・レイヴィンという人の『クリプト』という

本の翻訳が出るんですけど、これがまた暗号について人間を中心に描いていくのね。だから、この『暗号解読』にも出てきたジマーマンって人が、ある日ストリップ小屋に行ったときの話なんかがあつて、ストリップパーのおねえちゃんが『あんな、何者？』『さうさうさうさう』あたしもあんなが作ったソフト使つてんのよ！』って、ストリップパーと意気投合したとか、わけのわからぬ話が出てる」

ははははは。『暗号解読』はこの本の本にしてはかなり売れたんですけど山形「すごい売れたみたい。なぜだか知らないんだけど」(笑)

稲葉「あと暗号と関係なくはないという意味で『CODE』(ローレンス・レツグ 翔泳社)が今回落ちたのは残念ですよ。山形さんが訳なのに」(笑)

(笑)『CODE』というのはどんな本なんですか？

稲葉「今の段階でインターネットと社会の問題を考えると、これは必携の本じゃないですかね。ネットのことを例に取りながら、管理社会化がどう進行していくかを普遍的に考えていて、例えば、管理社会と言っても単に国家権力の目論見とかいうんじゃない、普通の一般利用者がキチンとした暗号が欲しい、セキュリティが欲しいというふうに、市場が管理統制を自ら受け入れる部分がある話とか、管理とか統制とか言つけど、誰がなんのために何をや

ってるのか具体的に見ていかないとしようがないっていうことを様々な事例とともに言ってるという」

なるほど。では、山形さんの2冊目にはいきたいんですが、『報酬主義をこえて』(アルフィ・コーン)を選ばれたのは、どんな感じなんですか？

山形「まあここ数年、企業でのリストラに関して、一方で首切るって話と一方で社員がやる気を出すにはどうしたらいいかっていう両方の文脈で『実力主義、報酬主義だ』って声が出てきてると。まあニンジンぶらさげりや人は働くっていうのはわかりやすいんだけども、極端な例として言えば、ピカソに『お前、いっぱいポナスやるからいい絵を描け』って言つても、たぶんいい絵はできないだろうと。基本的にこの本はそういうことを言ってるんですよ。むしろ絵を描くこと自体が動機付けにならないと、結局動機は小さくなつてくだけだよと。で、セレクトには挙げなかつたんだけど、『ファンキービジネス』(ヨナナス・リッデルストラレノシエル・ノードストレ 博報堂)

という本があつて、これも近い内容で書いてあることの半分ぐらいはIT革命素晴らしいとか、そういう話なので『お前死ね』って感じなんだけども」

ははははは。

山形「その一方で、人はもう少し自分が面白いてことにこだわんなきゃいけないと。彼らの主張というのは、今

はマルクスの世界が実現されてるんだと(笑)。要するに、現代というのは知的労働の部分が増えてると。従つて、今は労働者が生産手段を取り戻しているんだと言ってますね。つまり第二次産業がメインだった頃というのは資本家が工場とか機械とか、生産手段を持つてて、労働者はそれを使うだけだったと。だけど、今の労働者は生産手段を自分の頭脳に持っている。だからそれを使つてもっと面白いことをやるうって話で。2冊ともそういう意味では元気になる本」

じゃあこの本を山形さんはビジネス書として読んだつて感じですか。山形「うん。ビジネス書としても読める。この本は実はアメリカのフリーソフトの連中のあいだでは一つのバイブルで。マイクロソフトに行つて金もらつて一所懸命ソフト書くぞというのに対して、『そんなことしてもいいソフトなんか書けねえよ。見る、マイクロソフトのソフトを。彼らは楽しんでねえんだ』って、そういうことの裏付けとして出てきた本なんです。だから、ほんとにそうかつていうのはキチンとした検証が必要なんだけれども、ただそれ以外のところでも、人のやる気をどうやって出させるのか話では非常に参考になる本だと思いますね」

稲葉さんはどうでした？

稲葉「この人は、この前の本『競争社会をこえて』で有名になって、それで

これが出たんですけどね。その意味では、割と前作の延長線上で、あんまり冒険してないなあ(笑)。だから、そういう人事みたいな側面で言うと、講談社現代新書の『成果主義と人事評価』(内田研二)、あれも良さそうなんですよね。現役の人事マンが書いていて。最近では富士通の社長がいるいる響聲発言を言ったりする時代なんで読んでおいてもいいかなと(笑)。

米のタレント議員と日本の議員の違い

(笑)では、次は『社会調査』のウソ(谷岡一郎)なんですが、これはどんな理由で？

山形「これは、その名の通り、社会調査に関するごまかしを指摘しているものなだけども、これを選んだのは世の中、新聞とか雑誌とか統計とか世論調査とか、ああいうものを読むときに『知ってるよ、これ』と。グラフのごまかしとかはよくある話だけれども、もっと基本的な部分で操作されてるんだから、『騙されんじゃねえよ』というあともう一つは、やつちやいけなさいことだけれども、自分がごまかすときのやり方の参考にもなるというか(笑)。実は僕は某総合研究所で働いてるんですが、バックキャストという、この本でもちよつと出てるけども、あらかじめ出したい予測点が決まっています、そこから考えてデータをはめ込んでくっ

ていうやり方があって。同僚にそういうのやったことありますかって訊くと『あ、すいません、やりました』っていう人が9割以上で」

ははははは。

山形「だから逆にそういうのに騙されないでくれっていうかね。内閣支持率とかでもそうだけど、基本的な世の中のメディアの煽り方を見るときに勉強になる。実は僕も稲葉さんが推薦してたので、『あ、こんなのあるんだ』って読んだんだけど」

稲葉「この人は、知る人ぞ知るギャンブラー社会学者で、『ツキの法則』(PHP新書)という本で、ギャンブルがどういうものかというのをキチンと確率論として書いていて。だから、キチンとした訓練を受けた人で、博打について書いているという意味では非常に希有な存在なんです。この『社会調査』のウソも、扱っているのは統計的調査ですけど、要するに確率の知識についていう意味では『ツキの法則』と同じような問題意識なんですよ」

まあ社会調査に対する疑わしさって我々でも皮膚感覚としてもあるじゃないですか。だから、こういう本って結構あるのかなとも思ったりしたんですけど、そんなことはないんですかね。山形「うん。というか、統計でウソをつく方法とか、その手の本なんかはいくつかあるけれども、ここまで簡潔にまとまったっていうのは、僕はあんま

り知らないですね」

稲葉「ないでしょうね。社会調査の教科書みたいなものはあるけど、社会調査を読みこなす能力。これを彼は『リサーチ・リテラシー』と呼ぶんだけど。そういう観点から書いた本というのはほとんどなかったんですよ」

じゃあ、この本というのは結構決定版という感じなんですかね。

山形「うん。個人的には、あまりこれを読まれると、我々の仕事があればバレルというのもあるんだけど(笑)でも読んでほしいです」

稲葉「こういう本は大事だと思えますね。今やエクセルで誰でもデータ解析の真似事ができるような時代だからこそ読んでほしいって感じですね」

なるほど。次は『福祉資本主義の三つの世界』(イエスタ・エスピン・アンデルセン)という。

山形「これはねえ、まあ最近、将来高齢化社会で年金があるとかねえとか、そういう話は日本でも多くて。『じゃあ今後世界はどうなるのよ、俺が年取ったときにどうやって養われるのよ』っていろいろを考えたときに、セイフティネットが要るとは言うんだけど、その具体像がなかなか見えてこないっていうのがあって。その点この本は、セイフティネットの在り方、人をどうやって養ってくかというパターンを分類して、こういう道があるんだっていうのを示してくれてるという」

稲葉「これは原書は8年に出た本なんだけど、世界的な名著で。福祉国家論という分野で完全に新しいパラダイムを提起したと言われているんですよ」

山形「何を言ってるかっていうと、福祉を提供するやり方っていうのは、別に国がお金使っちゃって話だけじゃないと。家庭も福祉を提供するものだし、企業も、福利厚生とか、年金とか、そういう形で福祉を提供する。そうすると、国全体、社会全体としての福祉を考えるときに、単に国が福祉政策を厚くすればいいって話じゃないだろうと。家族による福祉を高めるとか、企業が福利厚生を提供しやすくするっていう手もあるし、そこらへんの混ぜ具合が大事なんだよ、ということも言ってるんです。そして、その混ぜ具合によって福祉国家を類型化している。だから、今後は年金どんどん切られてますし、実際これから我々があと数十年して定年を迎えて、どうしようかって話を考えると、今のうちに政府が何をしようとしているかを見るきっかけぐらいになるといいなと」

稲葉「でもやっぱり、日本では先に訳された、この次の本(『ポスト工業経済の社会的基礎』桜井書店)がいいんだよね。この本に対する批判を受け入れて、更に先に進んだ論を展開してて。例えば、この本の終わりにもし出ているんですが、みんな高齢化のことを問題視してるけど、そこから漏れてるのは

どこかっついたら女性と子供で。それを今の日本の現状にあてはめると、まさに日本での労働政策の課題として若年者の教育訓練がこれほど問題になるってことは、誰も予想してなかったんですね。そんなところをしっかりと突いていて。ヨーロッパのような若年層の失業者なんて日本は無縁だつてみんな考えてたんだけど、あつという間に似たような社会になってきてる。そういう福祉国家の在り方を紐解くという意味では重要な一冊だと思います」

そして、山形さんの最後の1冊が『プロレスラー知事』(ジェシー・ヴェンチュラ)。これだけちよつと他と毛色が違うんですが(笑)。

山形「いや、これはね、まず、俺、この人好きっていう(笑)」

ははははは。

山形「もう一つはやっぱり後半、お金をかけないで選挙に受かって政治の話に入ってきたときに、彼の政策というのは非常に明解なんですよね。例えば学校の問題も、日本であれば石原慎太郎なんかは自分の子供はちゃんとエリート校に入れた上で、一方で学校教育への補助をしないとか、そういう話をするけれども、彼は自分の子供はちゃんと公立学校に入れると。『自分のコミュニティで子供を育てられないなんてけしからん』と。おお、こいつ偉いと。あと、この人の娘さんは身体障害者なんだけど、身障者もちゃんと普通

の学校行けるようにすればいいと。で、それを実現していると。だから、政策の明解さという点では今の日本の一部のタレント候補と通じるところはあるんだけど、彼のほうが一貫性を持っていて、しかもそれを実際にやっちゃってるという。だから、これを読むことで、この人と対比して日本のタレント候補はどうかというのを少しは考えていただけるとよいなあ。あと、それ以外でも、この人は圧倒的に面白い人生送ってるので、読みなさいと(笑)」

稲葉「だから、この人の考え方で、政府はなるべく手を出さないっていうリバータリアン(自由主義者)に近くて、だけどコミュニティを維持するんですよ。市場主義というわけではなくて、自発的コミュニティを重視するというのは面白いポイントですね。アメリカならではの草の根主義つつかね」

山形「うん。あとアメリカの選挙って恐ろしくて、もう郵便番号別に、この地区の人はどういう人種でどのくらい所得で、どういう嗜好を持っていてっていうデータベースが全部完成してて。選挙運動ってほとんどそれに合わせて上手くセリフを決めてやると、全部ホイホイ動いていうすごいことになって。だけどそういう観点から見ても、この人が知事に当選したケースは意外だったらしいんですよ。だから、彼の選挙運動自体研究対象になっていて、この人の政策もおそらく研究

対象になるでしょう。なるべく政府はタッチしないし、規制もしないっていう政策っていうのが上手くいくんかいなっていう。それこそリバータリアンの一歩手前みたいな政策だけでも、その実験としてもすごく面白えなど。だから、すごく注目してます」

『だれが「本」を殺すのか』の迫真性

わかりました。では、稲葉さんの5冊にいきたいんですけども、『だれが「本」を殺すのか』(佐野眞一)は非常に話題になった一冊ですが。

稲葉「いや、これはやっぱり読んでおかないと。本礼賛論ではないんだけど、でも、IT革命がどうか言ってる今、本が大事であるっていうことが改めてわかるというか。今、本の在り方が革命的に変わっているのはわかるんだけど、ただそれがどこに行くかなんて誰にもわからない話で(笑)。そういうときに現場に寄り添ったこういう本は非常に大事だし。特にメディア論とか言ってる奴はこれ読まなきゃいかんだらうと。まあ、社会教育を考える上での基本文献だと思いますけどね」

山形さんはどうでした？

山形「いや、面白かった。なんか2ちゃんねるでは、みんな点が辛くて、『古くせえ本擁護論だよ』という感じで(笑)、全然期待していなかったんだけど、やっぱり2ちゃんねるなんか信

用しちゃいけないなと(笑)」

ははははは。

山形「ただねえ、佐野眞一という人は全般的に出てくる結論はそんなに面白いと思わないのね。この本でも、いろんな人のインタヴューは『おおっ！』って感じなんだけど、最後に残るかっていうと、あんまり残らない(笑)。それが惜しいなと思うんだけど、ただ逆に言えば、ディテイルの迫真性みたいながあるんですよ。僕、この人の『カリスマ』(日経BP社)を読んだときにすごく不満で。何月何日に何店のオープンにやって来て、キャベツがねえって指示したとかいう話がずっと書いてあって、それがどうしたっていう(笑)。『キャベツ売ろうが何しようか、知るかよ、そんなこと』って(笑)。そういうところは不満だったんだけど、ある意味これを読んで、そういうのもありかなという気はした」

稲葉「どこかの書評で、印象はいつぱい積み上がるけどトータルな数字でどうなってるかが明解に示されないという批判があつただけど、それはやっぱりリポライターの仕事ではないですよ。むしろそういうことやんなきゃいけないのは学者なんだよね。トータルな出版産業界が学術的に日本にないこのほうが問題で。この人責めるんじゃないよ、経済学者、経営学者を責めるよっていう感じですかね」

では、2冊目は『フロン』(岡田斗

司夫)なんですが。

稲葉『フロン』は、まあ『夫をリストラせよ!』で有名になりましたけど、批判は簡単なんです。『リストラって言うけど、要するに夫が家庭で何もしないで楽するだけじゃん』って。だけど、この人の真意というのは、より効率的に使うために外部化したほうがいい場合には夫を外部化する、それがリストラだと言うわけですね。つまり、『家族というのは社会のマネージメントの単位である』と言い切ってるわけですよ。例えば、結婚してようが、子供がいらないカップルなんてのは、ただの同棲だと。『家庭というのはケアしなきゃいけない対象をケアするためのシステムなんだ、愛情とか安らぎとか言ってる暇があるか、バカ野郎。とにかくそういうケアをできるだけ効率化して、その担い手に余裕を持たせなきゃダメだ』と。この問題提起は絶対的に正しいですよ。これが真面目に子育てやってる父ちゃん母ちゃんの気持ちだと僕は思いますよ」

度規制の大きいコミュニティみたいなものを作るうっていう話をするんだけど、それに對して我々は、もうある程度の自由っていうのを味わっちゃったので、昔みたいに縛りの多いところに戻って、父権の確立とか、移動の不自由なコミュニティってものを確立しなきゃいけないっていう考え方は辛いだろっていう。それは非常に現実味覚えるし。そこをちゃんと前提にしてくれてるといのは嬉しいな。よく子供の面倒をみられないって話になると、『親がしつかりしねえからだ!』って話になって、親の辛いほうにばかり話が進むんだけど、そうじゃない。その意味でこれは、上手くいくかは別問題だけれども、新しい考え方を打ち出せてるなあと思います」

現代経済の入門書『サイバー経済学』

次は、『階層化日本と教育危機』

(苅谷剛彦)というものなんです。

稲葉「この本のポイントというのは二つあって。一つは日本のゆとり教育が政策としてかなりまずいってことを明らかにしたことです。ここでは統計をもとに本格的な社会学の作業でそれが述べられてるんですが、そこから言えるのは、たぶんゆとり教育に限らず、日本の政策というのは、きちんとした政策評価、政策の効果を調べるということをやつてこなかったって

ことです。同時に政策批判にしても、

イデオロギー的に批判することじゃダメで、政策のパフォーマンスを見てダメだと突きつける類のことをアカデミズムが怠ってきたことまで明らかにしてしまってるんですね。まずこれが一点です。そして第二点としては、この本が出るまでは、いわゆるヨーロッパなんかの階級構造は日本では教育の面でも当てはまれないというのが通説で、それは実際間違いじゃなかったんですね。格差はあるんだけど小さいし、上も下も文化的には結構共通で階級文化のような分断がないと。教育社会学でも割とそういう感じの研究が多かったんですけど、この刈谷さんの本は、むしろヨーロッパのような格差が日本でも始まつてるのを統計によって明らかにしているんです」

山形「アメリカでは、そういう教育社会学というの、人種問題と密接に絡んだこととして出てきて。例えば、知能試験で“yard”っていう言葉が出てきたとして、黒人の貧しいところなんかが中庭のある家なんかに住んでないわけですよ。そういうところから白人の上位を温存させるための人種差別的なものだっていう批判があつて。だから、もしかすると、アメリカ経由で日本にそういう教育社会学が入ってきたときに、日本では人種の問題があまりないから、格差なんかに関して『まあ、あれは関係ねえや』っていうのも

あつたんでしょうね」

『サイバー経済学』(小島寛之と

いうのはどういう理由で?

稲葉「これは新書版サイズで、キチンと経済学の基礎を踏まえながら、経済の先端領域までをカバーした啓蒙書で。まあ確かに、サイバーというか、ITの発達でこれほど金融取引がややくしなってってるなか、オーソドックスな経済学の道具で平明に解説したものはあまりなくて。そういう意味で、これは非常にいい。金融革命に関しては、いろんな本があるけど、それこそ金融革命の経済学というレベルに達してるものはそんなにないと思いますね」

山形「第1章の“サイバー経済”を読んだときは『SF作家ウィリアム・ギブソンがサイバーパンクという分野を樹立し、ギブソン原作の『J.M』という映画が大成功を収めたときは』って、嘘つけ、あれ大コケしただろう!」

ははははは。

山形「この人あんまり知らないだろうって思ったんだけど、2章以降は面白い。バブルの話もキチンとしてて。世にあるバブル批判の本は、『あいつらバブルなんて、こんなこともわかんなかったのか、バカ!』っていう本ばかりだけど、これはそうじゃなくて、バブルのなかにいる人にとって地価がガンガン上がってれば、確かにおかしい水準には来てるけれども、来年ぐらいまではもつたらうっていう判断は

合理的であるんだよ。ただみんなが合理的な判断しても、全体としてよくなるわけじゃねえんだって。話を非常にキチンと押さえてるし。ミクロ経済学とマクロ経済学の違いみたいなのもキチンと押さえられてるし。あと、最後のほうではS I G H Tでも連載している小野さんの理論も説明されていてわかりやすい(笑)。

80年代以降の経済の教科書として、すごくコンパクトにまとまったものなのかなと思っただけですけど。

山形「うん。ただこれだけじゃないダメだけだね」

稲葉「初めの一步。匂いを嗅ぐにはいいんじゃないかと思うんですよ」

じゃあ、最後は『経済の本質』(ジーン・ジェイコブズ)という。

山形「これは……難しい本だよ。言ってることは、経済の原則というのは、自然の持つ原則と、たぶん似たようなところがあるはずだという。例えば経済的に言うと、いろんなものに出すよりも一つのものに特化して作ったほうが効率いいってなるけれども、でも自然を見るとほとんど多様な方向に進んでるし、経済ってそんな一極集中で一つのものだけ作ってるのがいかにいけないことかっていうのがわかるだろう、って説明してて。でも、この本の一番不満なところというのは、経済のやり方と、それから自然のやり方のあいだに似たところがあるのはわか

った。けど、『お前そつからどうするんだよ?』って話がいまいち……」

稲葉「まあ、やっぱり、この本だけでは困るというか。この本はジェイコブズの経済理論の現時点での総括みたいなところがあるんですけど、確かに前著(『市場の倫理、統治の倫理』日本経済新聞社)と比べると若干迫力が落ちる。ただ、今の日本はジェイコブズの著書がほとんど絶版で読めないって非常に困った状況になっていて。そういうなかでとりあえずジェイコブズを紹介したかったという」

前著は面白いんですか。

山形「前著は、世の中には市場でカタがつくことと市場ではカタがつかないことがあるんだって話で。それをゴツチャにして、なんでも市場で解決できるとか思うのは間違いで。だから、国は、市場で解決できないモラルってものをまた別のやり方でオペレーションしなきゃいけないって話を、非常に筋道立ててして。そのなかでNGOとか、政府とか、そういうものの役割もかなり上手く整理されてる。『おお、こういう整理ができるんだ!』という」

稲葉「まあ、このジェイコブズというのは例外的な存在なんです。この人以外にプロの経済学者から尊敬されるアマチュアの経済評論家ってのは、まずいないんですよ」

山形「うん。経済だけじゃなくて、こ

の人の本は都市工学とか都市設計の事業では必読の副読本になってるので。そこでしてるのは、区画整理して、はいこオフィス、ここ住宅っていうやり方がいかに有害であるかっていう。そこにあつたコミュニティであるとか、都市の活力そのものを支えていた社会的な仕組みを全部破壊するやり方がいかによくないかって話で。じゃあそれを生き長らえさせるにはどうしたらいいかっていうのをずーっと、発想の根本に置いてた人。そのなかで、ローカルな人たちの活動を支えるって

いうのが非常に大事なんだ、それがまた経済全体を支えることにもなるんだって話から、ほとんど話が経済全体のほうに進んでいったんですよ」

『ザ・ゴール』の有効性

では、最後に編集部の5冊にいきたいんですが、『マツキンゼー式世界最強の仕事術』(イーサン・M・ラジエール)。これは読んでみてどうでした?

山形「いやー、これは『へーん』でなもんでしかないんだけどなあ(笑)。まあ、プレゼンのやり方とかプロジェクト構築の方法とか、かなり具体的な記述があるから参考にはなるんだろうけど、ただ、これを読んだからといって、仕事できるようにはならない(笑)」

はははは。稲葉さんはどうでした? 学者の立場から。

稲葉「いやあ、あなるほどな、コンサルタントってこういう仕事してんのかって。だから、そこそいい会社で、そこそ仕事をしながら、ちゃんと鍛えられてる人にとつては参考になるかもしくないけど、それ以外の人々にとつてはどれくらい役に立つのかとか、ちよつと僕にも判断できないなあ」

山形「確かに会社のなかで、上司にプレゼンしなきゃいけない、社内ミーティングでなにかしなきゃいけないときにはそこそ使えなくはない。ただ、アメリカのビジネススクールを出た坊ちゃん嬢ちゃんがよくやるのが、会議とかで、これの目次みたいなことをそのまま口走るところがあつて(笑)。『まず我々はこの会議において問題の本質を見極めなきゃいけません』『そんなこと知ってるよバカ野郎!』と」

はははは。

山形「だから読むのはいいし、使えるところは使えるけれども、目次そのまま読むような真似はしないでね、すぐバシるから、という(笑)」

(笑)。では次に、今年最も売れた『チーズはどこへ消えた?』(スベンサー・ジョンソン)という。

山形「なんでこれ買うの? みんな」稲葉「うん(笑)。間違ったこと言っていないかもしくないけど、大の大人が今さら別にどうでもいいじゃんという(笑)。それだったら『バター』の『もついいからここにいなさいよ、のんべ



稲葉「いや、ていうか、このロバート・キヨサキっていう人は、自分とこの投資教育ゲーム、なんだっけ、そう『キヤッシュフロー』、これを売りたいがための本なんでしょ？(笑)」

山形「『キヤッシュフロー・フォー・キッズ』。いいよなあ(笑)」

稲葉「投資っていうのが有効なビジネスを育てることなんですよ、だから金融とか株は別に汚いもんじゃないんですよ』って言うことは確かに大事なんだけど、じゃあそういう生産的な投資を一般投資家がするためには何をしたらいいかっていうと、とんでもなく高いハードルが日本にはある。例えば投資信託にお金を預けたらいいかっていうと、投資信託の連中が勝手な(笑)ことをやるわけでしょう？」

山形「うん。だから要するに、この本の前提自体が間違ってるんだよね」

稲葉「そう。自分のお金を使って役に立てられる人がいるんだったら、まあ貸してもよろしいと思ってる人は日本に結構いると思うんだけど、誰に貸しやあいいのかわからないわけで。実際この著者がやったのも、自分で汗水たらして働いてるわけですよ。会社にまず雇われて、ノウハウ蓄積して、自分で独立して、ビジネスをしてお金を貯めましたって話で。地道なんです。稼いだお金をいかに上手に回しますかじゃなくて、やっぱりその前の稼ぐところにあんたの成功の秘訣があったん

でしょ、と。だからちよつとね、拍子抜けするわけ(笑)」

へえ。じゃあ資産運用を喚起する内容の本ではないんですか。

山形「書いてる意図としてはたぶんそういうことしたいんだけども」

稲葉「伝わってくるのは、運用するほどの資産はやっぱり働いて得なきゃな、っていうことだね」

山形「うん。あと、運用するといいいよっていうのと現実じゃあそれができんの？という話は、またちよつと別のわけですよ」

なるほど。じゃあ大体一通り5冊見ていったんですが、最後に5冊から外れてしまったお勤めの本などあればお聞きしたいんですけども。まず稲葉さんのほうから。

稲葉「僕は4冊。文化に対して進化論的なアプローチをした『表象は感染する』(ダン・スベルビル 新潮社)。同じく進化論という点では『ダーウィンの危険な思想』(ダニエル・C・デネット 青土社)。怪しいところも多いんだけど、AIとか社会生物学とかを考えるのに、なんかしら使える。あと山形さんから挙げた『福祉資本主義の三つの世界』の関連という意味で『社会変動の中の福祉国家』(富永健一 中公新書)。福祉国家としての日本の現状をわかりやすく教えてくれる啓蒙書です。最後は『イギリスと日本』。なぜヨーロッパではイギリス、アジアでは日本から産業革命

が始まったのかということをとータルに分析しています」

では山形さんは？

山形「僕は2冊。一つは、森山和道さんも誉めてた『人体部品ビジネス』(粟谷剛 講談社選書メチエ)。2年前に出たものなんだけど、臓器売買がビジネスとして成立するようになってきて、それに対する倫理的問題も山ほど出てきてるんだけど、人が治るといって大義の下とどん進行している実態がキチンと書かれた本。もう一冊は、科学書ではないんだけど、瀬名秀明の『虹の天象儀』(瀬名秀明 祥伝社)。プラネタリウムの閉館をテーマにした話で科学書と小説の中間みたいな感じで、サクッと読めるし、非常によいもんじゃないかと」

(笑)ちなみに編集部から挙げた5冊の中で、一番まとまったのはどれなんですか？

山形「『ザ・ゴール』」

稲葉「うん、間違いないですね(笑)」

じゃあ一番きつかったものっていうのは？(笑)。

山形「『チーズ』』はねえ、500円なら許すかなとか、そういう世界だよ」

稲葉「うん。あと『みんなの経済学』も後半かなり危ないよね」

山形「でも、個人的には『金持ち父さん』のほうがいやらしいというか、煽りという面ではこれが一番煽ってるという、そういう気はしますね」